

## 〈巻頭言〉

## オスカー・ワイルド読み直しの動向

玉井 暲

(大阪大学助教授)

ワイルドの読み直しが始まったのを痛感する。

ここ10年にも満たないうちにワイルド研究をめぐる英米の状況が激変した。おそらくその契機となったのはリチャード・エルマンの『ワイルド』であろうが、こここのところ新しいワイルド研究が出ればとにかく買って置くということが続けるあいだに、いつのまにか20冊以上の本が書棚に並んでいるのに気がついた。そのほとんどはワイルドについての個別的な研究書であるから、ワイルド研究がいよいよ本格化したのを実感せざるをえない。

特に90年代に入って顕著になってきた傾向として、ジェンダー批評、あるいはセクシュアリティに基づいた研究が指摘できるように思われる。ワイルドにおける同性愛についての研究は、むしろ、無くは無かった。ただ、その研究のありようが、人間ワイルドと作品という二つの相異なる次元を設定して分化される傾向にあっただけに、ここに、ワイルドの人間、人生、作品を統合的に捉えるひとつの視点が提起されたと言えるのではあるまいか。ワイルドのテキストが、文学的、文化的、社会的、政治的といった幾つかのコンテキストの交錯し合うなかで読み直されることによって、そのラディカリズムが目ざされていく。この立場からの研究者には、イギリスでは Jonathan Dollimore と Alan Sinfield が代表であろう。アメリカ系では、Ed Cohen, Richard Dellamora, Christopher Craft, Jeff Nunokawa, Eve Kosofsky Sedgwick などが挙げられよう。

もう一つ見逃せないのは、ワイルドの劇を当時の演劇界や文化の状況とのコンテキストにおいて新しい意味を掘り起こそうとする試みである。あまり知られてない先行劇作品や、同時代に上演され好評であったが、出版されなかった作品との比較検討を行うなど、日本のわれわれにはできそうにない貴重な研究である。Kerry Powell がその代表であろう。

こうして見ると、最近の研究は、作品を文学固有のコンテキストから一度解放してやることをめざす傾向にあると、まずは言えそうだ。ここでひとつ留意すべきは、この解き放されたテキストが、文化、社会、歴史といったテキスト外の世界と交錯し、せめぎあい、意味を創出する磁場は、言葉においては他にはないということだ。言葉から遠ざかることへの警戒が求められよう。

新ワイルド全集は、イギリスの Ian Small が準備中という。Oscar Wilde Encyclopedia (AMS Press) は、アメリカの Karl Beckson が今秋、出版予定だと聞く。われわれの『オスカー・ワイルド事典』の編集・刊行が待たれるゆえんである。